

多様性を未来への原動力に

豪州に学ぶ



自治体国際化協会・多文化共生部報告 4

世界中から社会の担い

手として外国人を受け入

れているオーストラリ

ア。民族、言語、宗教な

どが異なる地域から、多

くの人が家族とともに移

住している。移住した家

族は当然ながら家庭内で

は母国語で会話をを行う。

このため、家庭で英語以

外の言語を使う家族の割

合は26%に達する。この

状況は、移民の家庭で育

つ子どもたちの学びの環

境にも影響する。

子どもの教育

に入学する前に、英語で

行われる授業についてい

けるか試験を受ける。難

しいと判断された場合、

英語を集中的に学ぶた

め、州が運営する語学学

校へ通うことになる。

その二つのコリンウツ

ド英語語学学校では、5

歳から18歳までの子ども

たちが現地校への編入を

目指し、週5日間、1日

5時間の授業を受けてい

る。子どもたちは5段階

の英語レベルに応じたク

ラス分けするが、なるべ

く同年代の子どもが同じ

に限られる。

移住して間もない子ど

もを対象とするクラスで

は、全く触れたことな

い英語に戸惑いと不安を

隠せない。少し慣れたク

ラスでは、自主的に壁に

貼ってある単語を何度も

練習する姿がけなげに映

る。卒業が近いクラスで

は、英語で映画を見た後、

英語でグループワークす

るなど現地校でも立派に

やっていける様子だ。そ

こでの教師は、「指導者」

というよりも温かく自立

を手助けする「協力者」

の子どもたちにとって

「言葉(英語)を話せる」

ことは、まさしくエンパ

ワメントであり、大き

な自信につながる。また、

英語で「コミュニケーション

」を取れるようになる

のと、母語や文化が異なる

相手のことも理解できる

ようになる。

一方、日本にも外国に

ルーツを持つ子どもは多

く存在する。

「言葉(英語)を話せる」

ことは、まさしくエンパ

ワメントであり、大き

な自信につながる。また、

の仕組みが十分に作られ

ているとは言えない。移

住した子どもたちの教育

の仕組みを一層整えてい

くことが求められている。

同校のキャサリン・マ

クモン校長は「『互い

に個性を認め合った上で

社会を構成し、参画する

』という、まさにインクル

ージョン(包摂)が、当

校の学びの根本にある。

学校生活で育まれるダイ

バーシティとインクル

ーションは、子どもたち

にとって大きなチャンス

だ」と語る。

の所管が国際担当か教育

委員会かの議論があるな

ど、子どもたちの視点で

の仕組みが十分に作られ

ているとは言えない。移

住した子どもたちの教育

の仕組みを一層整えてい

くことが求められている。

オーストラリアには、

英語以外の未修得の言語

環境で他の教科を学ぶこ

とにより、他言語を身に

付けることを目指す「イ

マージョン教育」に取り

組む学校もある。「イマ

ージョン」とは「言語に

教室はどこにもぎやか

教室に日英2カ国語併記

だ。1、2年生のクラス

では、算数の四角形や三

角形などの授業が日本語

で行われ、子どもたちは

質問に日本語で答えてい

た。4年生のクラスでは、

2言語の授業で読み・書

き・思考することで認知

取り組んでいる。併設の

能力が伸び、「モノリン

ガル」よりも創造力が育

まれ、多角的なものを見

方が形成されるという。

さらに、子どもたちが2

言語の習得という多様性

を自らのものとして理解

し、「生きる力」をつけ

た。4年生のクラスでは、

思い思いに日本語作文に

取り組んでいる。併設の

準備学級の5歳児が、ス

ライドに映される動物の

絵に合わせて、我先にと

日本語で様々な形容詞を

つなげる。日本で生まれ

ながら日本に何らかのつ

なかりを持つ子どもは2

割程度だが、多くの子ど

もたちが日本語で質問さ

れば自然に日本語で答

え、友達同士では英語で

会話している。

州内にはイマージョン

教育の小学校が12校あ

る。こうした学校で手厚

い言語習得機会と多様性

の活力を身に付ける子ど

もたちの姿は、未来のグ

ローバル社会を反映して

いる。グローバル化が進

む中、日本で今後どのよ

うな教育を目指すのか、

ヒントとなるだろう。

